

疱瘡絵の文献的研究

はじめに

浮世絵の一つに「疱瘡絵」と呼ばれるものがある。疱瘡（天然痘・痘瘡と同義）に罹った病人の枕元近くに貼られたり、見舞品として贈られた簡略な一枚絵である。疱瘡神が描かれているものもあるが、多くは全面、濃淡二種の紅（赤）のみで、ダルマ（起き上がり小法師）や犬張子やミミズクなどの玩具、または獅子舞いや宝船などの縁起の良い絵柄が摺られている。さらにそれらに、紅の文字で狂歌・狂句ともとれる画讃を添えてある形式をもつものがほとんどである。今日では何の予備知識もなくこの絵を見て、疱瘡に関連した浮世絵と思に至る人は少数であろう。

疱瘡絵は、美術的価値に乏しいものとして長らく浮世絵研究において正面から取り組まれることはなかったが、近年、文化史や民

俗学の観点から疱瘡絵の研究が進展した。H・O・ローテルムンド「一九九〇・一九九五・一九九六」、吹田市立博物館「一九九五」、藤井裕之「一九九五」、町田市立博物館「一九九六」などである。

とりわけ、フランスの日本宗教・民俗研究者ローテルムンドの著作「一九九五」は、日本人が長く忘れ去っていた疱瘡絵を再発見し、その全体像を初めて本格的に論じたものと位置付けることができる。その研究は、疱瘡絵に描かれたさまざまな図像と書き込まれた歌や文言を分析・考察することによって、疱瘡絵に込められた呪術・宗教的な観念の究明をめざしたものであった。ローテルムンドは、多くの疱瘡絵を通観した後、その表現内容を主に三つのモチーフに基づいて説明する。

一つ目は疱瘡退除のモチーフで、図像としては鎮西八郎為朝や鍾馗、獅子舞いがこれに相当する。これらは疱瘡を威圧し、駆逐でき

川部 裕 幸



図3

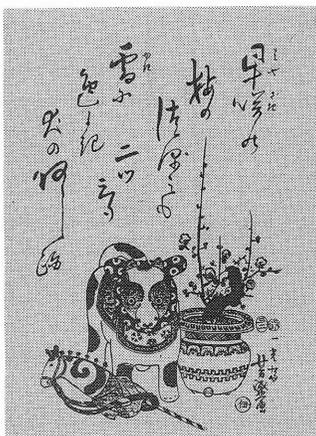


図2

(図1～3 花咲 [1981] による)



図1

ると期待された英雄神明であり、かれらが疱瘡に対して呪的威力を有することを歌った場合もある。(図1)

二つ目は、正月や祝祭的な世界にかかわるものである。春駒や羽子板、梅、蓬萊山などが描かれたり、歌の中に詠み込まれている疱瘡絵がこれに当たる。これらは、その吉祥性によって疱瘡の災厄を祓い退けようとする論理から出た

ものである。(図2)

三つ目は、元気に遊んだり笑ったりする子供を描いたり詠んだりしたもので、子供の回復の予祝をモチーフにした疱瘡絵の一群が見られるという。(図3) 彼はこのように疱瘡絵の表現内容に関して初めて全体的な展望を示し、次のように総括する。

疱瘡や疱瘡神に直接挑んで悪を取り去るべくこの疫病と闘うような場面を描いた図像・呪歌は少ないのに対して、病気の治癒を予祝したり特定の事物や時間が象徴する祝祭的世界を描いた図像・呪歌は多く見受けられる。「ローテルムンド 一九九五 …一二七」

疱瘡に対して直接的な対抗表現が少ないという見解は、従来から指摘されている日本人の疱瘡観、すなわち疱瘡に対して攻撃的な姿勢で臨むのではなく、受容的な態度が見られるという指摘とも合致するものである。

ローテルムンドの論考は多種多様な図像と歌がかき込まれている疱瘡絵の世界を鮮やかに説き明かしたものであり、疱瘡絵については彼の研究をもって語り尽くされた感さえある。しかしまた、彼の研究は作品解説に重点がおかれたものであり、表現内容以外に関しては十分な検討がなされていない一面があるのも事実である。すな

わち、疱瘡絵に関しては基礎的な事柄がまだ十分に解明されているとは言い難い。名称の問題やその範囲、使用の実態、発生や系統、流布の状況などである。あるいはまた、疱瘡絵を近世町人文化が生み出した一つの商品ととらえるならば、それが新しい商品として開発され、売買され、消費された現場や文脈を検討する作業も必要となろう。現存する疱瘡絵は、麻疹絵¹³よりも少数であるが、おそらく麻疹絵とは比べものにならない数量が、生産されたはずである。その生産・流通・消費の実態はほとんど明らかにされていない。どのような意図で作られ、どのように流通し、いかなる人々がいかなる思惑で購入したもののなのか、等々について明らかにすることは、疱瘡絵の問題を考える上で、欠くことのできない課題である。

今日、博物館や図書館に収蔵されている疱瘡絵に、所与の作品として対峙し、その表現内容を分析し、当時の人々の疱瘡についての観念を析出していくことを目指す先の図像学的・象徴論的な研究と並行して、疱瘡絵がその当時置かれていた環境を解明する作業も必要とされるだろう。そこで本稿では、主に文献資料を用いて、疱瘡絵に関して、上記の事柄を改めて検討することで、疱瘡絵研究の幅を広げることを目的とするものである。

一 疱瘡絵の名称と範囲

一一 史料の中の疱瘡絵

まず、「疱瘡絵」という名称とその指し示す範囲について検討する。そもそも、「疱瘡絵」なる用語が、近世の一般の人々または浮世絵関係者の間で使われていた言葉なのか、それとも後世になって、浮世絵研究家の間で使われ出した専門用語なのか、判断としない。おそらく近世から使われていた言葉と推測するが、残念ながら史料的には確認できていない¹⁶。

近世の疱瘡の様子を伝える史料の中から、疱瘡絵に関わりそうな部分を抜き出してみよう。戯作者曲亭馬琴の孫お次が、疱瘡に罹った時の様子が『馬琴日記』に記されている。

天保二年（一八三二）二月九日

昼飯後より、お百（馬琴の妻）、新鳥越さるや町、白山権現へ参詣。お次疱瘡の守札並に護符等、申請、暮六時前帰宅。帰路、為朝の紅絵かひ取持参。白山神主さしづに任せ、右守札、痘神棚に貼じ、供物等神主さしづの如く、奉祭之。八丈島為朝神影、旧来所持の分も二幅同断。（史料一）（括弧と傍線は引用者が施した。以下同）〔暉峻 一九七三・二九八〕

これは、お次が生後一〇ヶ月で疱瘡に罹ったときの馬琴の日記である。馬琴の妻のお百は、孫の病氣平癒を願って、当時疱瘡神として信仰を集めていた浅草新鳥越猿屋町の白山権現にお参りし、お守り札と護符をもらい受け、その帰路、「為朝の紅絵」を購入して家に戻った。家では疱瘡神の棚（祭壇）を設け、それに白山神社の神主に指示された通りに、お守り札を貼り供物を供えた。また、以前から持っていた「八丈島為朝神影」も同様に奉祭した、というものである。

「為朝の紅絵」とは、この文脈から考えて、為朝を紅で描いた疱瘡絵と判断してまず間違いはないであろう。また、もう一つの「八丈島為朝神影」であるが、これは近世期に疱瘡守護神として有名であった八丈小島の為朝神社（八朗明神）が江戸に出開帳を行った際、崇敬者に頒布した為朝像（神影）を掛け物仕立てにしたものである。その神影かと思われるものは何点か現存している。疱瘡平癒に靈験を發揮するものとして掲げられる図像ではあるが、紅摺りではなく、墨摺りであるので、厳密な意味では疱瘡絵とは言えない。

幕府の御鷹匠同心、片山勇八の息子椿助が六歳で疱瘡に罹った時の記録が、『御鷹匠同心 片山家日常襍記抄』にある。

文政十一年（一八二八）六月十四日

松岡大助殿、椿助が見舞として、くハシ（菓子）一袋・紅絵九

枚、持參被具候。（史料2）「アチック 一九七三・四二九」

椿助は、多くの見舞客から色々な手遊びの品や食べ物や贈られるのであるが、その中の一人松岡大助は、菓子と「紅絵」をもって来てくれたのである。江戸時代、親戚知人の子供が疱瘡にかかると必ず見舞いに行くことが、交際の慣例となっており、以下の史料もそのことを示している。

甲斐の医師橋本伯寿は、合理的な伝染病論と今日評価されている『国字断毒論』（文化七年、一八一〇年）を著わしたが、その中で文化年間ごろの甲斐の国において、疱瘡病人がいる家の様子を次のように書き記している。

（前略）親族知音よりおもひくりに当世の錦絵・干菓子・餅・酒・或ひは絹布・衣類など我ましに贈りたるを痘瘡病の寝処のあたり処とらせくまで飾かけて、其品の多を其家の面目とす。（史料3）「森 一九七〇・一〇七」

福島県岩城郡草野村の民俗報告には、恐らく幕末から明治初頭にかけての話と思われるが、子供が疱瘡にかかると、座敷に笹のある青竹を四方結んで神棚を作り、「其神棚には親戚や懇意から見舞として贈られた江戸絵を貼る」とある。（史料4）「高木 一九二八・

一六八

また、福井県大野市の旧家に残っている天保年間の「疱瘡見舞諸事留帳」には、「江戸絵」や「雛」が見舞品として記帳されていることが報告されている。(史料5)「南川 一九九一・三三」

さらに、山梨県山梨郡下井尻村の旧名主依田家には、寛延三年(二七五〇)から安政二年(一八五五)までの歴代の疱瘡見舞帳が八冊残っている。疱瘡見舞帳とは、香奠帳に似た形式で、主に見舞人の名前と見舞品名を列記したものである。依田家が受けた見舞品の中には、鉢・坪・重の内などの容器に入った食糧、あるいは樽酒・茶・そうめん・菓子などの嗜好品、扇子・布・きれなどとならんで、「絵」や「紅絵」がしばしば見られる。(史料6)「太田素子 一九九三・一八八〜一九〇」

以上のように、「疱瘡絵」の字句は用いられていないが、「紅絵」や「錦絵」や「江戸絵」などとそれぞれの土地で呼ばれていた絵の類が疱瘡見舞品としてしばしば史料に登場する。この絵が、今日われわれの言う疱瘡絵であるのか否かは、現物が伝存していない限り直接検証することはできないのであるが、後に述べるように、疱瘡絵が疱瘡見舞いに贈られる慣行のあったことを勘案すると、そうである可能性は高いといえよう。

また、後述の史料に見られるように、「赤絵」「紅摺りの絵」などの言葉も使用された。(6) 今日では「赤絵」「紅絵」「紅摺絵」とも、研

究者の間では「疱瘡絵」とは別個の意味をもった専門用語として用いられているが、もちろん、そうした用法が確立していない近世の人々の間では、その土地土地の言い方にしかたっているだけであろうが。

一 二 疱瘡絵の定義

疱瘡絵という言葉の初見であるが、筆者が現在確認しているものでは、浮世絵研究家飯島虚心の『日本繪類考』(明治三十三年二月序)の中に見られるものが早い。もっとも、「疱瘡絵」は目次のみを用いられ、本文では「疱瘡画」という漢字が当てられているが、「疱瘡画」は「ほうそうえ」と訓じられると思われる。

『日本繪類考』は、上古より近世に至るまで、さまざまな呼称の絵画を全部で一五六種列挙し、それぞれに考証を加えた書物である。その中に「疱瘡絵(画)」の一項が立ててある。七〇〇字程度の文章であるが、半分以上は浅草御門内馬喰町四丁目にあった菓子商淡島屋の軽焼きの広告文の引用である(後述)。飯島は冒頭で「疱瘡除けの鍾馗」の絵について言及し、次のようにコメントしている。

按ずるに、疱瘡画は、古くは鍾馗の図、専らなりしが、後世に至りては、浮世絵師、専ら起きあがりの達磨・みみずくの類、又は金太郎・犬張子の類を画きて、板木に上せ、絵草紙屋にて

売り捌きたり。明治の世となりて、絶えてあるなし。(史料7)

(送り仮名を現代表記に改め、句読点を施した)。「飯島 一九〇

〇]

疱瘡画の画題は、古くは鍾馗ばかりであったが、時代が下ると浮世絵師が達磨やミミズク、金太郎・犬張子などを描いて版行したものを絵草紙屋において販売していたという。飯島は、何の注釈もなく、「疱瘡絵(画)」の呼称をつかっている。当時の研究家にとって、十分に聞き慣れた言葉であったと思われる。

「疱瘡絵」という用語について注釈が見られるのは、明治四十三年一月の浮世絵研究雑誌『此花』における宮武外骨の文章である。さまざまな名称の浮世絵を一つずつ取り上げ、解説を加えていく連載記事「日本浮世絵類纂」の第一回目「紅絵」の冒頭に次のようにある。

紅絵と云ふと雖も、紅彩色のみにあらずして、藍色をも加ふ。

俗に藍色を「青紅」と称して紅の一種なりとする異説もあり。

墨版のなき紅の一世にて摺りたるものを紅絵と称するならんと

云ふ人もあれど、そは紅絵といふものにあらずして「疱瘡絵」

なり。紅絵には藍の外黄又は緑を加へたるものもあり。「宮武

一九一〇a・一三]

ここで外骨のいう紅絵は、今日では紅摺絵と称されるものであるが、それはさておき、当時、用語として「紅絵」と「疱瘡絵」が併用(あるいは混用)されていたことを示す文章である。そうした中で、外骨は、疱瘡絵とは「墨版のなき紅の一世にて摺りたるもの」と、彼なりの用法を示す。

三年後に朝倉無声も同じような連載記事「日本版画類纂」の第二回目で「疱瘡絵」を取り上げる。ここでは外骨の影響があったのかもしれないが、「疱瘡絵といへば、総て紅色に薄紅をあしらつた、二遍摺のものと定まつてゐる」と、端的かつ明確に述べている[「朝倉 一九一三・一四」]。

大正七年の相見香雨[「一九一八・二一」]も、「普通疱瘡絵といふのは、紅一色で濃淡二度摺にした簡単な玩具絵の一種」と、無声の定義を引き継ぎ、現在の事典類もこの定義を採用している。

一―三 疱瘡絵の周辺

浮世絵は、摺りの様式、画題、紙や色・顔料の種類などを指標として、さまざまに分類され名称がつけられるが、無声の疱瘡絵の定義は、画題すなわち表現内容から分別されたものではなく、色と摺りの様式から見た分類である。この疱瘡絵の定義は、美術的な浮世絵研究の上では、適切であるかもしれないが、浮世絵を資料として、

そこから当時の人々の疱瘡にまつわる観念や行動を解明しようとする文化史的な立場の研究においては、もう少しその周辺まで目を配る必要がある。なぜなら、疱瘡に関連する浮世絵はこの定義に収まるものだけではないからである。たとえば、歌川国芳には、疱瘡の疫神と疱瘡守護神である源為朝を赤・青・黄・緑・黒などの多色摺りで描いた作品があり、歌川国麿にも同様な「為朝大明神由来」の作品がある。⁸⁾これは紅の濃淡二度摺りの作品ではないが、疱瘡にかかわる浮世絵としては外せないものである。

また、疱瘡見舞いによく持参された菓子袋にも疱瘡絵と同じ絵柄が摺られていた。先に引用した飯島虚心は、次のように言う。

また按ずるに、疱瘡画は、絵草紙屋にて売りたるが、疱瘡流行の時には、菓子袋などへも、達磨・金太郎などの絵を紅摺りにして、売りたるものと見えて、菓子商淡島屋の軽焼の袋に（中略）達磨及び金太郎の熊に跨り、斧をふりあげたる玩具を画けり。〔飯島 一九〇〇〕

この種の絵が描かれた菓子袋は、江戸近郊では非常に一般的であったらしく、太田和子は、次のように述べる。

疱瘡の見舞にはだるまやフクロウの絵を赤い顔料で刷った袋に

入った菓子を贈った。此の風習は江戸時代にはよくみられ、当時の人々は「赤絵袋」といえば疱瘡見舞を連想した。袋の中身は疱瘡が軽くすむようにの願いを込めて「軽焼き煎餅」や赤く着色した「落雁」であった。〔太田和子 一九九七・四三〕⁹⁾

そして、この種の菓子の袋は、切り開かれて一枚摺りの疱瘡絵として扱われることが多かったと指摘されている〔サントリー美術館 一九九七・一二三〕。

また、疱瘡見舞品としてしばしば贈られたものに、赤色のみで摺られた疱瘡絵本と呼ばれるものがある。子供の喜びそうなお伽噺や軽口話を、紅摺りの挿絵と紅の文字の詞書き（本文）、丹色の表紙に紅摺りの題箋、赤糸綴り、と赤ずくめで仕上げた絵草紙である。

この疱瘡絵本も、一枚一枚が破り取られて、疱瘡絵と同様な扱い（呪的な効果が期待された護符としての扱い。次節参照）を受けた可能性が示唆されている〔サントリー美術館 一九九七・一二四〕。

さらに、疱瘡絵の淵源に、朱（あるいは紅）で描かれた鍾馗の画像があることは後で触れるが、これは、版画ではなく、肉筆画である。北斎にも肉筆の朱鍾馗の作がある。

このように見ていくと、濃淡二種の紅で二度摺りされた一枚絵としての疱瘡絵の周辺には、多色摺りの浮世絵や菓子袋に摺られた赤絵や疱瘡絵本や肉筆画があったことがわかる。絵画資料を通して近

世の人々の疱瘡観を探ろうとする文化史的な立場からは、これらの作品も除外することはできない。作品の形式は異なるが、次節に述べるように購入者や使用者が期待した役割は同じであるとの意味において、これらを別物扱いすることはできない。

どのような浮世絵版画を疱瘡絵と看做すのかということを決める場合、三つの指標を設定することができる。

一つは、すでに述べてきたように、宮武外骨や朝倉無声や相見香雨に見られるように、色と摺りの様式を指標とした定義である。

二つ目は、描かれている内容を指標とするものである。疱瘡にかかわる題材すなわち疱瘡の疫神や疱瘡守護神、あるいは疱瘡に関連する画讀を付して玩具や吉祥的な事物や役者などが描かれている浮世絵である。

三つ目は、用途からの定義である。詳細は次節で述べるが、疱瘡絵は、疱瘡病人が享受・賞玩する消費がほとんどであったと推定される。そこで、疱瘡病人のために購入されることを前提として作製され販売されていた浮世絵を疱瘡絵と定義することもできよう。

この三つの指標によってそれぞれ囲い込まれる浮世絵群は概ね共通するものではあるが、一部は重複しない作品もある。どの指標を中心として考察を行うかは研究目的に拠ることは言を俟たない。本稿においては上述の立場から、一番目を中心としながらも、二番目・三番目も十分考慮して論を進めていきたい。

二 疱瘡絵の使用の実態

現在、われわれは博物館や図書館に保存・展示され、あるいは画集や図録に収載されている疱瘡絵に対して、鑑賞あるいは作品分析という形でのみ接するわけであるが、当時の人々は疱瘡絵をどのように取り扱っていたのであろうか。またそれをどのような用途に当てていたのか。

当時、疱瘡絵がおかれていた基本的状況は、前節の史料7の中に述べられているように、まず、絵草紙屋で売られている商品であったということ、そして、病人のために購入され、使用され、廃棄されるという流れの中にあつたということである。以下、このことについて具体的な資料を提示しながら説明しよう。

二一 見舞品としての疱瘡絵

前節に提示した史料に見られる通り、疱瘡絵は『馬琴日記』（史料1）のように病人の家族が購入する場合もあるが、史料2〜6が示しているように見舞人が購入して病家に贈る場合がほとんどであった。当時、浮世絵版画は、そば一杯か二杯と同じ値段といわれているが、疱瘡絵は紙も小さく、摺りも簡略であつたので、もっとも安価な浮世絵であつたと思われる。したがって、手ごろな見舞品として購入され、贈られたと想像できる。

疱瘡絵（紅絵）が、疱瘡見舞品として一般的であったことの一例として、文化八年（一八一二）に大阪で刊行された薩西隱の『進物便覧』の記載をあげることができる。この本は、冠婚葬祭や五節供・中元歳暮・見舞い・土産など進物（贈答）を伴う儀式や行事、付き合いについて、その大意と心得を説き、それぞれに適切な進物品を例示した、いわば作法指南書である。「見舞部」では、暑氣見舞・寒氣見舞・疱瘡見舞・湯治見舞・留守見舞（参宮）・仏事年忌・彼岸と香奠・非常見舞（洪水と火事）の八つの見舞いが取り上げられており、疱瘡見舞いが近世後期においては、交際上の慣行として確立していたことを窺わせる。そして「疱瘡見舞」の項では、見舞品として、赤い色をしたもの（おもちゃ・食物・布類・小物類など）とならんで、「絵本るい」と「紅絵るい」が例示されており、紅絵が疱瘡見舞いに適切な品目として認定されていたことを示している。「雄山閣・第七卷 一九五九・三三二～三三三」。

農村部においても、疱瘡絵（紅絵）は、疱瘡見舞品として多用された。児童文化・教育史の太田素子「一九九三」が研究した甲斐国下井尻村の依田家の事例を紹介する。

下井尻村は甲府盆地の東北端に位置し、青梅街道に接する純農村であり、依田家は村の名主を務めた旧家である。依田家には、六代にわたって計八冊の疱瘡見舞帳が残されており、様々な見舞品が記載されていることは前節史料6で述べたとおりである。

八冊の見舞帳を通して、多用された見舞品を、頻度の高いものからあげると、次のようになる。扇子を贈った見舞人が合計一四一人、茶一三五人、紅絵（または絵）一〇一人、菓子六〇人、樽酒五六人、そうめん五五人、おこわ・餅などが五四人、布・きれ二六人……となり、紅絵（または絵）は、下井尻村においても疱瘡見舞品としてかなり一般的なものであることがわかる。⁽¹⁰⁾

このように疱瘡絵は、疱瘡病人の見舞品として購入され、病家に贈られる消費がほとんどであった。別言すれば、疱瘡見舞いでもないのに、疱瘡絵を買う人はほとんどいなかったのではないかと思う。その理由は、疱瘡絵は、摺りも赤のみの単色で、構図・題材ともそう奇抜なものはないし、洒落たものもない。したがってこれが、一般の大人が普通に見て楽しむものとして販売されていたとは思えないからである。そういう意味からすると、疱瘡絵は購入者・使用者とも限定された、かなり特殊な浮世絵版画ということになる。

二―二 病家における疱瘡絵の扱い

二―二―一 護符としての疱瘡絵

贈られた病家では、疱瘡絵はどのように取り扱われていたのだろうか。史料3には、「錦絵」は痘瘡病人の寝床のあたりに飾りかけられたとあり、史料4では、「江戸絵」は疱瘡神棚に貼るとある。また医学史家の中野操「一九八〇…七四」は、典拠は示していない



図4
(国立歴史民俗博物館所蔵)

が、枕屏風などに貼ったものだという。

疱瘡絵の使用の実態を示す貴重な絵画資料が図4である。この浮世絵は無題ではあるが、『太平記忠臣講釈』七段目「喜内住家」の歌舞伎舞台の一場面を描いたものと推定する。七段目は俗に「疱瘡子」とも言われ、登場人物矢間喜兵衛（喜内）の孫の太市が疱瘡に罹っているという舞台設定である。図4はモノクロであるため判りにくい。原図では、枕屏風の内側に「ダルマと豆太鼓」の絵柄と「為朝」の絵柄の二枚の疱瘡絵（濃淡の紅の二色摺り）が貼ってあることが確認できる。疱瘡絵を小道具として枕屏風に貼る演出の意図は、舞台が疱瘡子の居る場面であることをより現実感をもって観客に伝えるためであろう。疱瘡絵が当時一般的であったことから生まれた演出であろう。この浮世絵は版元の印と絵師の画号から、嘉永

年間（一八四八〜一八五四）のものだと判断できる。

疱瘡絵を枕屏風などに貼付する意図は、装飾や鑑賞のためというより、疱瘡平癒に呪的な効力を発揮すると期待されていたからである。その意味で、疱瘡絵は浮世絵でありながら一種の護符のような役割を担わされていたと言える。

疱瘡絵が、なぜ、疱瘡平癒に効力があると想定されていたのか、その呪力の源泉は二つある。一つは、疱瘡絵が赤色のみで摺られているという色彩的特質であり、もう一つは図像および添えられた讚（ローテルムンド）「一九九五・一二七」の言い方に倣えば「呪歌」にある。疱瘡絵の図像と讚がいかに疱瘡治癒に効果を期待されたものがあるかという点については、ローテルムンド「一九九五・一〇九〜一二七」に詳説されている。また本稿の「はじめに」でその概要を紹介したので、ここではこれ以上言及しないで、もう一つの理由である色彩的特質について述べる。

赤（朱と丹と紅を含む）が古来、魔除けの色として用いられてきたことは、言うまでもないが、特に疱瘡除けと強く結び付いた理由は、当時の医学的な知識と深い関係がある。疱瘡は人によってその容態に大きな差があり、軽く済む場合と、重態に陥り命に関わる場合があった。当時、疱瘡のできもの（痘疹）の色が紫あるいは黒紫の病人は重篤となり、痘疹の色が赤い病人は軽く済むという医学上の定説があった。これは専門家の間だけで流通していた知識ではな

く、近世期には広く一般庶民まで知れわたっていた知識である。庶民はこの知識を「疱瘡神様は赤色が好きだから、赤を見せると軽く済ませてくれる」、あるいは反対に「疱瘡神は赤色が嫌いだから、赤いものを見るとすぐにいなくなる」というように、疱瘡神信仰と融合させながら受容し、流布・伝承していった。そこで、病人の身の回りにできるだけ多く赤いものを配備するという疱瘡独特の看病の方法が生まれてくる。衣服、布団、足袋、玩具、食べ物、疱瘡神の幣束、供物、すべてを赤色にする。病人の身の回りをすべて赤で埋め尽くして、病人の痘疹をその赤色に染めようとする呪術的発想である⁽¹⁾。

近世期に広く読まれた医師香月牛山の一般向け育児書『小兒必用養育草』（元禄十六年序、一七〇三年）にも、「屏風衣桁に、赤き衣類をかけ、そのちごにも、赤き衣類を著せしめ、看病人も、みな赤き衣類を著るべし、痘の色は赤きを好とする故なるべし」とあり「同文館 一九一一・三二〇」（傍線は引用者）、また渡充子の『痘瘡養育』（寛政七年、一七九五年）にも、「痘ハものにあやかりやすきゆへ、紅絹を屏風などにかけて出ものをして紅活にやぶならしめんがためなり」とあって、この赤づくめの看病法は、医師も奨励していた。また前掲の『進物便覧』には、「疱瘡見舞に第一に嫌うものは紫色なり、誰しも心付かざるにはあらねど、時にとりては忘るる事あり、無事なる時はよろし、変事あるときは気毒なり、よって菓子類

江戸錦絵画本の袋など随分気をつくべし」とある「雄山閣・第七卷 一九五九・三三三」。疱瘡見舞いに紫色が禁物であることはだれもが知っていることではあるが、うっかり忘れて紫のものを贈った場合、無事に回復したときはよいが、変事すなわち病死などしたときは、家族が紫の所為かと悔やみ、気の毒であるので、見舞品の袋などにも紫色がないように注意すべし、ということである。また、江戸中期の諺類を収録した辞書、松葉軒東井編の『譬喩尽』（天明六年序、一七八六年）にも、「疱瘡見舞に衣裳、黒色・紫色忌むべし」という格言が収められている「高羽 一九五二・一一二」。疱瘡見舞品に、紫色は厳禁であり、赤色が最適であることは、近世の常識であった。疱瘡絵はこの赤づくしの看病法に貢献するものとして、贈られ、使用された。

以上のことから、疱瘡絵には、疱瘡治癒の願いを込めて貼られる護符のような用途が、まず一つあったと指摘できる。

二―二―二 「おもちゃ絵」としての疱瘡絵

しかし、疱瘡絵は全部が護符として貼られたわけではないだろう。すべてが貼付されたにしては枚数が多すぎるからである。史料②の鷹匠日記では一人の見舞人が九枚の「紅絵」を持参している。また、史料⑥の依田家の疱瘡見舞帳には一人で二、三枚の「紅絵（または絵）」を持参した人がかなり見受けられる。文化八年（一八一）の

見舞帳の記載では、七〇名の見舞人のうち三六人が「紅絵（または絵）」を贈っており、全部で六〇枚近くの紅絵（絵を含む）が依田家に集まったことになる。これらがすべて貼られたとは想像しにくい。この量の多さは、疱瘡絵に護符以外の用途があったことを示している。

疱瘡絵には、いろいろな玩具やそれで楽しそうに遊んでいる子供たちを描いたものがある。この種の疱瘡絵は、疱瘡を威圧・駆逐すると期待された鍾馗や為朝が描かれた疱瘡絵とは、凶像の与える印象が大きく異なっており、護符として貼付されたとは考えにくい。

この種の疱瘡絵は、子供たちが手にとって眺めたり、玩んだりするためのものであったと思われる。

近世期、疱瘡は今日の麻疹（はしか）や水痘（水疱瘡）と同じように主に子供の罹る病気であった。疱瘡に罹った子供は一、二週間は病いの床につくことになり、また回復後もしばらくは外気にさらされることを避けるために、室内で過ごすことを強いられる。先にあげた『小兒必用養育草』には、「痘瘡瘵えて後、小兒をして、園の中又は庭に出て、土座にて遊ばしむべからず。四五十日過ても、かならず変症出て、急に死するものなり」と、病後の安静が説かれている〔同文館 一九一一・三四七〕。したがって、疱瘡に罹った子供はかなりの期間、戸外で遊び回ることを制限され、室内でおとなしくしていることを強要される。これは遊び盛りの子供にとって

は非常に退屈な時間となる。こうした事情があるので、疱瘡小児への見舞品には、退屈している子供が室内で遊べるようにとの配慮から、遊び道具が贈られることが多い。前掲の『進物便覧』にも、疱瘡見舞品として、人形・からくり・知恵の輪・虫めがね・金魚・小鳥などが推奨されている。史料上の『馬琴日記』でも、疱瘡に罹った太郎（お次の兄）への見舞品として、落雁や魚、ゴボウなどの食べ物とならんで、張子達磨・車つき鯛・手遊び馬などの玩具が贈られている〔暉峻 一九七三・三〇六～三一七〕。

実際の玩具もしばしば贈られるが、玩具や子供を描いた疱瘡絵も贈られた。そこには、病床に臥せて、気もふさがちな子供が、これらの絵を手にとって眺めることで、慰められて気晴しができ、少しでも元気が出るようにとの見舞人の配慮があったと思われる。戸外で遊べなくて退屈している子供は、疱瘡絵の中の遊んでいる童児の姿に、自分を重ね合わせることで、楽しい空想の一時を持つことができたのであろう。¹²⁾ また贈る側からしても、実際の玩具よりも値段も安いし、紅摺りは既に述べた呪的な効用も兼ね備えるので、重宝な見舞品であったと言える。したがって、依田家の六〇枚もの紅絵は、護符の用途だけではなく、疱瘡小児の気晴しやなぐさみのためのおもちゃ・手遊びの品として、かくも大量に贈られたと解釈すべきであろう。

疱瘡絵という浮世絵版画が「おもちゃ」「手遊びの品」と言う

奇異な感じを与えるかもしれない。現代のわれわれは、浮世絵と聞くとき、美術品・鑑賞の対象というイメージが強いのであるが、近年、美人画や役者絵、風景画などのいわゆる芸術作品としての浮世絵の陰にあった子供のための浮世絵、すなわち「おもちゃ絵」の再評価がなされている。「おもちゃ絵」とは、文字どおり、子供のおもちゃになる絵のことであり、子供が手にとって眺めたり、玩んだり、あるいは切り抜いて貼ったりして遊んだ後、捨てられてしまうような浮世絵である。このような浮世絵がかなり版行されていたことが、近年再発見されている。一部の疱瘡絵の絵柄は、この「おもちゃ絵」と共通するものがあり、したがって、同じように取り扱われたと考える「天理大学 一九九九、稲垣他 一九九四」。

朝倉無声「一九一三・一四」が、「疱瘡に罹つた小児のもてあそびものとして、かかる一枚摺物や絵草紙が発兌される事となつた」と述べ、また、相見香雨「一九一八・二二」が、「疱瘡絵といふのは、(中略)玩具絵の一種」であり、「疱瘡児が弄べば、軽くすむといふお守り的なものである」と述べているのは、このような状況を指し示しているであろう。

また、疱瘡絵本についても、同様な用途が指摘されている。すなわち、近世の疱瘡神祭りに見られる玩具について詳細な研究を行った香川雅信「一九九六・二六」は、次のように述べている。疱瘡絵本の中にはこれといったストーリーもなく、ただ様々な芸や見せ物

が面白おかしく催されている様がひたすら描かれているものがある。これは外に遊びに行くことができない子供が居ながらにして、様々な芸や見せ物を楽しむことができるようにとの趣向から、制作されたものであろう。

したがって、絵柄との関連もあろうが、疱瘡絵には、主として護符としての用途と、疱瘡小児の玩びものとしての用途があったことになる。

そして、実際にはこの二つの用途は、当時の人々の意識のなかでは区別されることなく渾然一体となっていたと思われる。たとえば、手にとって眺める使用には、退屈しのぎや気晴しに役立つという効用に加えて、疱瘡小児が赤いものに接触することによって、痘疹の色も赤くなってほしいと願う大人たちの呪的な思惑も働いたであろう。また、玩具やそれで遊ぶ子供を描いた疱瘡絵を玩ぶことによつて、「軽い疱瘡」の象徴である「遊びながらの疱瘡」(日々遊んで過ごしているうちに治ってしまうような軽い疱瘡)にあやかろうとする期待もあつたのかもしれない「香川 一九九六・三〇」。

二一三 回復後の扱い

疱瘡絵は、病人の回復後は海や川に流されるなどして廃棄されたと、医学史家の宗田一「一九七八・一五四」や中野操「一九七八・一〇八、一九八〇・七四」は言う。そしてこの風習があつたために、

疱瘡絵には、良好な状態で残っているものが少ないという。しかし、残念ながら、かれらは典拠を示してくれていない。そこで、このことについても具体的な資料を提示しながら検討してみたい。

山東京伝の滑稽本『腹筋逢夢石』三編（文化八年刊、一八一一年）、「張子の木菟、張子の達磨と法問」のなかで、ミミズクはダルマに向かつて次のような珍問を投げかける。

汝は大徳の祖師なり。我は無徳の鳥類なれども、おんなじやうに張子となり、疱瘡棚にならんで居れば、汝が九年の辛抱も、我安閑と暮らせしも、落つればおなじ谷川の、あるひは辻堂・地藏堂、紙屑籠に身を果たす。これいかん。「林 一九八四・

一三六」

これはもちろん京伝の創作の文章であり、事実の記録ではないが、疱瘡が落ちる（治る）と、疱瘡神棚に飾られていた張子のダルマやミミズクなどの玩具は、川や海に流されるか、お堂や祠に納められるか、あるいは紙屑籠に捨てられるというのは、当時の実際の習俗を踏まえた叙述であろう。疱瘡絵も同様な処理をされたと思われる。

甲斐の医師橋本伯寿は、前掲の『国字断毒論』（文化七年、一八一〇年）の中で、疱瘡の「毒気」が物に付着して、遠方へも伝播する危険性を指摘した段落において、次のような逸話を例にあげている。

天明七年（一七八七）末年の正月、八丈島榎立村の百姓幸助といふもの、海辺に出て遊び居たりしに、枕箱やうの物、浪に漂しを拾ひあげてひらき見れば、錦絵・土人形などありしゆゑ大に悦び、持ちかへりて其の子供の玩物に遣しけるに、忽ち痘瘡を病みはじめて、家内不残伝染し、村中一統に病みて死ぬるものもおほく、（中略）其の枕箱やうの物はかならず国方の痘瘡やみの玩物なるゆゑにかかる殃を引出したりとて、其の後は右やうの漂流もの有てもいひ伝て、拾ひとらずといへり。「森 一九七〇・一〇五」

八丈島の海岸に「錦絵」や土人形などが入った枕箱のようなものが流れていた。それは痘瘡（疱瘡）病人の使ったものであったが、そうとは知らない島人が拾い上げたために、島に疱瘡の大流行をみたというエピソードである。これが伯寿の直接見聞なのか、単なる巷談なのかは判断する材料がないが、少なくとも、国方（本土）では、疱瘡病人の使った錦絵・土人形などを、海や川に流すことがしばしばあるのに、八丈島の人はそのことを知らなかったということが、この逸話の興味を掻き立てる要点となっている。流すことは国方（本土）においては一般的なことということになる。

史料1の『馬琴日記』には供物や遊びものを、神社に納めた記述

がある。

天保二年（一八三一）三月四日

今日、太郎さき湯いたし候ニ付、疱瘡棚、撤之。白山権現守札並ニ幣、其外供物一式、だる磨を浅草山谷白山神主方迄持参、為納畢。白米一袋・鳥目百銅、外ニ奉納幟代銀壹匁、年々借用の小石等も進納之。（中略）疱瘡の式祭畢ル。「暉峻 一九七三 三三五」

これは、孫の太郎が無事、疱瘡から回復して、そのお祝いの儀式である笹湯（酒湯）を行った日の日記である。疱瘡神棚を片付けて、奉祭してきた守り札や御幣、供物やダルマなどを白山神社に納め、その上で神の御加護に感謝して、供米・奉賽金を奉納したという記述である。

疱瘡病人が使用した玩具や供物などを海や川に流す風習の背景には、疱瘡の伝染を避けるために、病人に関わったものを廃棄処分しようとする意図があったと思われるかもしれない。だが、神社や祠堂に納められることから分かるように、これは疱瘡神送りの考えに基づくものである。疱瘡神を送る儀式を行うことで、疱瘡が治ること（取り憑いていた疱瘡神が離れること）を、儀礼的にも演出するのである。⁽¹³⁾

後に触れるが、近世においても、疱瘡が伝染するものであることはよく知られていたが、疱瘡患者やその触れた物品を忌避する心性は、少なくとも都市部においては強くなかった。前掲の『太平記忠臣講釈』の七段目「疱瘡子（喜内住家）」の中に、次のような場面がある。浪人中の身の上で、長屋暮らしをしている主人公矢間喜内の孫、太市の疱瘡見舞いに、そろって顔を出した同じ長屋の住人たちは、太市の疱瘡が順調に回復しつつあることに、お祝いの言葉を述べて、その帰り際に次のように言う。

ヲ、そふせう。コレ婆様。疱瘡見舞いの持ち遊びは、必ず捨て
ずと、人形屋へおろして、小遣ひの足にさつしやれ。「阪口
一九九六・二四六」

疱瘡小児が使った遊びものを人形屋（玩具屋）に持っていくと、買い取ってもらえ、それが中古の商品として、再び販売されるのである。江戸は、古着や古道具など中古の商品の市場が非常に発達しており、長屋住まいの庶民は、新品の商品を買うことより、中古のものを買うことのほうが多かったと言われているが、疱瘡見舞いの品々もリサイクルされるのである。

実際、多くの疱瘡絵を収集した中野操「一九八〇・七四」は、疱瘡絵は川に流したものを拾ってきて売り物にするせいで、絵の色も

薄くなり、どんな構図かさえ見分けにくいものが多いと述べている。先の台詞は、もちろん歌舞伎の脚本の中の台詞であるが、庶民の実生活を反映した台詞であろう。これからも分かるように近世の庶民は、疱瘡を恐れたり忌避してはいないのである。したがって、疱瘡絵などを流す行為は、感染を防ぐ意図からではなく、神送りの儀式に繋がるものと考ええる。

二一四 疱瘡絵の流通・流布

疱瘡見舞いに用いられた浮世絵版画の実態について述べてきたが、この節の最後に、疱瘡絵は、全国でどのくらいの範囲に流通・流布していたものなのか、若干の推定を述べてみたい。

版元から出版状況を見ると、現存する疱瘡絵のほとんどは、十九世紀の江戸の版元から出版されたものである。しかし、大阪で文化八年（一八一二）に刊行された前掲の『進物便覧』の記載から、大阪でも疱瘡絵（紅絵）が用いられていたことが分かる。

購入者・使用者の地域的分布に関しては、個人の家から実際の疱瘡絵が発見された事例は、寡聞にして知らないのですが、疱瘡罹病の記録史料や疱瘡見舞帳の中に出てくる字句から判断せざるを得ない。

疱瘡見舞いに浮世絵版画が用いられた、時代・地域・使用者階層を、本稿の一、で提示した史料から列記すると、史料1…天保二年（一八三一）・江戸・中流町人層、史料2…文政十一年（一八二

八）・江戸・下級武士層、史料3…文化年間・甲斐国、史料4…幕末から明治初頭・福島県岩城郡草野村・有力農民層、史料5…天保年間・福井県大野市・有力農民層、史料6…寛延三年（一七五〇）から安政二年（一八五五）・山梨県山梨郡下井尻村・農民層、となる。

西日本の史料は少ないが、東日本はかなり広範囲にわたって、流通・流布していたと言えるだろう。筆者は目下、疱瘡見舞帳の史料を収集している段階であり、暫定的な推定にすぎないが、麻疹絵が文久二年（一八六二）の江戸に集中するのに対して、疱瘡絵は江戸後期の長らくにわたって出版され続け、全国的に流通した可能性があるのではないかと思っている。これが、麻疹絵より現存は少量であるが、疱瘡絵は大量に出版・消費されたと推測する理由である。⁽³⁾

小括

以上、この節では疱瘡絵の購入者及び購入意図、用途・用法、病人回復後の扱い、流通・流布の状況について説明してきた。縷々述べてきた疱瘡絵の使用の実態は、他の浮世絵版画に比べるとかなりユニークなものではないかと思う。疱瘡絵の用法や扱いについては、従来、中野操・宗田一そして相見香雨・朝倉無声が、簡単に触れている。本稿はかれらの説に大きく異を唱えるものではないが、これを具体的な資料に基づいて叙説することを意図したものである。

三 疱瘡絵の起りとお出

疱瘡見舞いに浮世絵版画を贈る慣習は、いつ頃から行われていたのであろうか、また赤一色の疱瘡絵はいつ頃どのような経緯をたどって生み出されたものであろうか、これらのことを最後に検討してみたい。

三―一 疱瘡絵の始まり

江戸の浮世絵関係者がまだ多くいたであろう明治三十三年、浮世絵研究家の飯島虚心「一九〇〇」は、「疱瘡画の始まり、詳らかならず」と書き記したが、一世紀を経て、疱瘡絵の起源は明らかにされないままである。「ローテルムンド 一九九五・一〇九」。

現在目にすることができる疱瘡絵から、古いものを探っていくと、北尾重政（作画期…宝暦後半～文政三年）や勝川春亭（同…寛政十年～文政三年）などが、現存する疱瘡絵の絵師では早いものである。

他の多くのものは、作画期が文化・文政以降の絵師の手になるものである。「原色浮世絵大百科事典 一九八二a」。

朝倉無声「一九一三・一四」は、「疱瘡絵版行の始めは、享和三年（一八一三）の夏、江戸に疱瘡大流行の時、其の見舞物として（中略）疱瘡絵の売れる事もまた夥しいもので、浮世絵師の一夜漬けの筆になった、鍾馗や金太郎や桃太郎や、乃至手遊類おもちゃあそびの粗画に、

戯作者の贊のあるものが、幾種類か数え切れないほど出版された」と述べているが、この見解には疑念を覚える。

まず第一に、享和三年に流行した疫病は疱瘡ではなく、麻疹である。「富士川 一九六九・一八四」。もっとも、麻疹に対しても疱瘡と似たような習俗は行われていたので、麻疹患者に赤一色の疱瘡絵が贈られたとしても不思議ではないのだが。それにしても、享和三年を以て、疱瘡絵版行の始まりとみなすことは問題である。これ以前にも疱瘡見舞いに浮世絵版画が用いられていたことを示す資料が存在するからである。

たとえば、北尾政演（山東京伝）の作に『御存商売物』という黄表紙がある。天明二年（一七八二）の刊行である。絵草紙本屋の商品（商売物）である赤本・黒本・小本・一枚絵・紅絵などが登場人物となり、お互いの評判を言い合ったり、謀はかりごとを巡らしたりする顛末を描いた作品であるが、その中に次の一節がある。

黒本が息子の小本、疱瘡をすると聞き、紅絵見舞べにえに行く。疱瘡の見舞に紅摺りの絵を遣ること、このいわれなり。「水野 一九五八・一〇〇」

もちろん最後の「このいわれなり」は、無理やりのこじつけでおかしみを出す黄表紙によく見られる表現であり、考証的には意味は

ない。しかし、この時代において、こうした諧謔的表現が成立するほどに、紅絵を疱瘡見舞いに遣うことが、少なくとも黄表紙読者層には知れわたっていたことが分かる。

また、川柳研究者の鈴木勝忠「一九八二・四三七」は、紅絵が疱瘡見舞いに贈られる例として、次の句を出している。「悟り得て今は達磨も紅絵にて」。これは延享二年（一七四五）の江戸の川柳集に収められているものであるが、すでにこの頃、達磨を描いた紅絵を、疱瘡見舞いに用いる風俗のあったことが確認できる。

あるいはまた、本稿の二一で紹介したように、太田素子「一九九三」が調査研究した甲斐国の農村部においても、明和四年（一七六七）、安永七年（一七七八）、文化八年（一八一二）、文政五年（一八二二）の疱瘡見舞帳には、「紅絵」が見舞品として届けられたことが記帳されている。

さらに、大槻清文堂「一九一五・一四」は、「疱瘡絵」と題する短文の中で、次のような報告を寄せている。

家蔵の『御伽機嫌宝』は表紙のみであるから、内容を知る事は出来ないが、表紙画の上に「疱瘡見舞の画本、寺井重房画」と記し、下には春駒や起上り小法師等の玩具の図があって、それには丹緑黄の筆彩色が施してある。

寺井重房は、多くの版本に作画した大阪の浮世絵師で、作画期は寛延年間（一七四八～一七五二）から天明年間（一七八一～一七八九）とされている。「原色浮世絵大百科事典 一九八二a・四八」。『御伽機嫌宝』を実際に確認することはできないが、丹・緑・黄の筆彩色とあるので、赤一色で摺られた疱瘡絵本とは言えないものであろう。しかし、「疱瘡見舞の画本」と明記されていたり、現存の疱瘡絵でよく見かける春駒や起上り小法師の玩具が描かれていることから、疱瘡絵本の前段階に当たるもの、あるいは後世の疱瘡絵に発展していくものといってもよいだろう。

以上提示した資料から、十八世紀の後半には、江戸や大阪などの都市部そして一部の農村においても、浮世絵版画を疱瘡見舞いに贈る慣習が成立していたと断定できる。ただ、この浮世絵版画は、資料の中では「紅絵」とのみ記されているので、濃淡二種の紅（赤）のみで摺られたいわゆる疱瘡絵かどうかは不明であるのだが。

三二 疱瘡絵の誕生と赤色の出版物

疱瘡絵の際立った特徴は、何といってもその色彩的特色、すなわち全面、濃淡二種の赤のみで摺刷されている点である。どうして、このような（おそらく美術的には情趣に乏しい）赤一色の浮世絵版画が生み出されたのか。その理由はすでに述べたように、疱瘡治療には赤色が有益であり、赤一色の疱瘡絵は、その治療に貢献するとき

れたからである。とすると、疱瘡絵は疱瘡見舞いに専用の品として、商品開発されたことになる。⁽¹⁴⁾このことを得心するには、近世の疱瘡の流行状況を把握しておかなければならない。

今日、疱瘡（天然痘・痘瘡）と聞くと、恐るべき疫病・伝染病というイメージがあり、その患者を見舞うための商品が店頭で通常に販売されていたということは、理解し難いものがある。しかし、これは近世の疱瘡を取り巻く状況に対する誤解から来るものである。⁽¹⁵⁾

近世、少なくとも都市部においては、疱瘡は冬から春先にかけて大抵毎年出現する見慣れた病気であった。したがって、都市住民は、ほぼ全員一度は罹患していた。麻疹（はしか）や水痘（水疱瘡）と同様に、疱瘡は一度罹患すると、終生免疫を残すので、二度かかることはまずない。言うならば、都市で暮らしていく限り、疱瘡に一度かかって免疫を持つことが、都市民に課せられた苦役であり、それは「役Ⅱ厄を祓う」と称されていた。疱瘡罹患とそこからの回復は、人生の中で一度は通過しなければならぬ大きな関門とみなされておき、また疱瘡は、「小児必患」の病いと呼ばれ、一人前の大人になるためには、必ず罹らなければならない病気と考えられていた。

したがって、わが子が疱瘡罹患をうまく乗り越えられるかどうかは、子供に慈愛を注ぐ親たちにとっては、非常に大きな心配事であった。そこで、親戚や知人の子供が、疱瘡にかかると、必ず見舞い

に行き、親子ともども元氣付けることが、付き合ひの上での慣例として確立していた。もちろん見舞いに行く大人は、一度かかって免疫を持っていない人であり、患者をまったく恐れていない。

このような背景があったので、疱瘡見舞品という商品ジャンルは、結構な需要があったのである。香川雅信「一九九六」は、近世の玩具屋・絵草紙屋・菓子屋などが、自分たちの商品について、いかに疱瘡見舞いに最適な品であるかを熱心に宣伝していた様子や、寺社・下級宗教者・芸能者・香具師までもが、「疱瘡平癒」を謳い文句にして営業に励んでいた実例を、詳細に叙述している。

こうした状況の中で、疱瘡絵という商品は開発され、誕生したのである。もっとも、突然に全く新しく生み出されたものではなく、その前史・前段階はあった。その一つに赤い出版物の系統が考えられる。疱瘡絵の登場によって、はじめて赤い浮世絵が出てきたわけではない。丹絵、紅絵、紅摺絵のように、赤（紅・丹）が目を引く絵はすでにあった。また、赤本は表紙のみ丹であるが、内容は子供向けのお伽噺が中心であった。したがって、疱瘡絵あるいは疱瘡絵本という商品が開発される以前から、疱瘡見舞いには赤い色のものがふさわしいだろうという配慮から、子供向けの紅絵や赤本が見舞品として利用されていた可能性は高い。

そして、疱瘡見舞いの品として一層ふさわしく赤色を強調した商品、つまり商品の赤色化が押し進められた結果、赤一色の疱瘡絵そ

して表紙・文章・挿絵・綴糸までが赤という疱瘡絵本が誕生したのであろう。すなわち、赤ければ赤いほど疱瘡見舞品として望ましいと考えた消費者のニーズと、できるだけ赤い商品を作れば、疱瘡見舞客という購買層にアピールすると考えた生産者の思惑（商魂）が、相乗的に働いた結果、徹底的に赤色化された疱瘡絵や疱瘡絵本などの商品が開発、誕生したと推測する。

三―三 疱瘡絵の出自

疱瘡絵はどのような浮世絵の流れの中から生まれて来たものであろうか。疱瘡絵にはさまざまな図像が描かれているが、図像によってはその系統・淵源を推測できる。

三―三―一 朱鍾馗の系統

疱瘡絵の淵源の一つに、本稿の一端で触れたように、赤色で描かれた鍾馗の図があることはほぼ確実である。鍾馗は唐の玄宗皇帝が病んだとき、夢に現われ、小鬼を捕えて帝の病いを治したという逸話で有名な豪傑である。中国では古代から、邪悪なものを祓い退けるための「辟邪の図」として用いられてきた。遅くとも唐代には、除魔逐疫のために歳暮歳始に、鍾馗の画像を掲げる慣例があり「小林一九四六・二三七」、このことは現代でも、年画の形で中国民衆のあいだでは引き継がれている。

また、端午節に臨んで、悪鬼駆除のために、朱で描いた鍾馗像を掛ける習俗が、清代に行われていたことも報告されている「国立故宫博物院 一九九七・一六二」。

赤（朱、丹、紅を含む）は中国でも太古から魔除けの色として用いられており、鍾馗像の辟邪の効力をさらに強めるために、赤（朱）で描くことも早くからあったと思う。

日本でも、鍾馗信仰は早くから上層階級に移入されていたことは、現在、国宝に指定されている旧益田家本「地獄草紙」乙巻の第四段「鍾馗図」から確認できる。この絵巻は、十二世紀後期の作とされるものであり「宮島 一九八五・九」、宮廷での行事に用いられたと推定されている「小林 一九四六・二九〇～三〇〇」。中世以降、日本でも中国に倣って、正月に辟邪の図像として鍾馗を掲示する行事が、民間でも行われてきた。江戸時代に入ると、庶民の間にも端午の節句に鍾馗像を掲げる風習が広まり、現在でも鍾馗が描かれた五月幟を見ることができると、近年まで、一年を通して門守りとして鍾馗の像を貼っておく風習が、関西の民家には見られた。したがって、魔除けの図像として鍾馗は日本でも相当早くから広まっており、病魔に魅入られた者の病床近くに、疫病神退散を祈念して、鍾馗の図を掲げる禁厭は、中世からあったものと思われる。

芸能史の福原敏男「一九九三」は、享和三年（一八〇三）の麻疹流行に際して、朱鍾馗の掛け軸が用いられた実例を、その作製の経

緯を記した手紙とともに紹介している。これは大阪のある村の旧家に伝来してきたものである。また歌川芳虎の麻疹絵にも、鍾馗の大きな掛け軸を掛けて、重ね餅を三宝にのせて供え、その前で跪坐して、手を合わせて拝んでいる母子を描いた構図のものがある [Janetta 1987 : frontispiece Yale Medical Library 所蔵] (図5)。

このような例からすると、麻疹にかかると鍾馗の掛け軸を掛け、回復を祈願する禁呪の方法は、近世後期には農村部や庶民にも知られたことであった。当然、疱瘡罹患に際しても同じようなことは行われたであろう。群馬県の一部地域では、現代の聞き取り調査においても、かつて子供が種痘をした時、朱書きの鍾馗の絵を床の間に掛けて疱瘡神を祀ったことが報告されているので、この風習は、かなり広範囲に行われたものと判断できる [根岸 一九八八・六一]。こ



図5

の疫病神退散の呪法が、庶民層へも広まっていく過程で、高価な掛け軸から安価な浮世絵版画へと、呪具(鍾馗画像)の軽便化・庶民化が起こり、その結果、疱瘡病人の枕元に鍾馗の疱瘡絵が貼られることとなったのではないか。

藤沢衛彦[一九六一・二一〇]の「民俗版画年表」によると、元禄九年(一六九六)に初代市川団十郎が鍾馗に扮した役者絵が出て、追儼の護符にされる、とあるので、鍾馗が浮世絵の画題に取り入れられるのは、浮世絵史上、かなり早い時期である。しかも、護符の用途に当てられたという事実は、後世、疱瘡絵の鍾馗へと展開して行くことを容易に想像させるものである。

以上をまとめると、次のようになる。日本では中世から辟邪の図として鍾馗があり、それが庶民化して浮世絵にも描かれるようになる。さらに疱瘡の療法として赤色が好まれていたところに、鍾馗にも赤色で描く朱鍾馗の画法が伝統的であったことなどが底流としてあり、その流れを汲んで、紅摺りの鍾馗の疱瘡絵が生まれ、普及して行ったと推断する。

三―三―二 玩具や芝居の浮世絵の系統

また、疱瘡絵には玩具が多く描かれているので、玩具を描いた浮世絵が、疱瘡絵の出自・源流の一つにあると考えられよう。相見香雨[一九一八・二二]は、疱瘡絵に見られる画題を、鍾馗・為朝・

桃太郎・金時……と次々と挙げていく中で、「高砂の尉姥・鶴亀・浦島・曳鯛・兎の餅つき・張子狗・角鴟かみすずなどの類は普通の玩具絵を紅摺あかぢりにしたに過ぎないが、それに無理にこじつけた狂歌や狂句が題してある」と記している。この文章からすると、曳き鯛（車付き鯛）・ウサギの餅つき・張子の狗（犬張子）・ミミズクなどの玩具を描いた、紅摺りではない「普通の玩具絵」が先にあつて、それが紅摺りにされ、さらに疱瘡に関連する讚が添えられることよつて疱瘡絵になつた、と解釈できる。相見のいう「普通の玩具絵」がどのようなものを指すのか、よく分からないが、たとえば、北尾重政画・讀者弄嬾子の玩具絵集『江都二色』（安永二年刊、一七七三年）などは、参考になるものと思われる。『江都二色』は、百近くの玩具を集めて描いた彩色の版本である。一頁ごとの一つ、あるいは二、三の玩具を描いて淡彩を施し、題讚の狂歌を配したものである。玩具を描いて狂歌を付す形式は、疱瘡絵に通じるものである。ミミズクと筒守りの玩具が描かれた一枚には、「今日は早、笹湯も仕舞ひ、筒守り、そのうれしきは家内づくづく」の狂歌が添えられている。「中村 一九九一・八五」。笹湯は先に述べたように、疱瘡回復のお祝いの儀式であり、筒守りやミミズク（「づくづく」に掛けてある）のお陰で、無事笹湯を迎えることができたという意が含まれている。絵柄・狂歌とも紅摺りにすれば、そのまま疱瘡絵としても通用するものである。そのほか、『江都二色』には、振りつづ

み（豆太鼓）・獅子頭（獅子舞い）・起き上がり小法師・風車・鹿島の幣束（鳥万燈）・竹馬（春駒）など、現存の疱瘡絵に見られる玩具が描かれているので、疱瘡絵の源流に、このような玩具の浮世絵があつたことが推測される。疱瘡絵はすでに述べたように、疱瘡小児への見舞品として、作り始められたものである。当然、子供が喜ぶ玩具の浮世絵をベースにして、疱瘡絵が商品開発されたことは想像に難くない。

また、古堀榮は「疱瘡絵」と題する小論の中で、「紅摺 暫図 無款 細絵」と「紅摺 和藤内図 無款 細絵」を疱瘡絵の参考図としてあげているが、その説明に次のようにいう。

両図とも宝曆より明和へかけての芝居絵で、筆者は鳥居派のものとして推定する。原画の墨線を除き、色板のみを使用し、之に紅一色に濃淡を施し、粗悪なる用紙に摺刷し疱瘡絵に応用したものの。天明頃の出版であらうか。「古堀 一九四〇：一四」

つまり、この二枚の紅摺とも、元版は芝居絵の「暫」と「和藤内」であつたが、それから墨板を除いて、つまり色板のみを使用して、紅一色で摺り直して、疱瘡絵にしたと推定しているのである。天明頃の出版とすると、年代が確認できる疱瘡絵の中では最初期にあたるが、初期の疱瘡絵の発生過程を想像させるものである。既成

の浮世絵を再利用し、赤色化を押し進めていく中で、赤一色の疱瘡絵の形式が確立して行ったのであろう。暫・和藤内とも歌舞伎では有名な豪傑であり、為朝・鍾馗と同じく、疱瘡を駆逐できる武威を有する人物として、芝居絵から疱瘡絵に転用されたものであろう。

三―三―三 護符(まじない絵)の系統

疱瘡絵の出自を推測する際、絵柄の系統だけではなく、その用法・使われ方にも着目する必要がある。先に、疱瘡絵は浮世絵でありながら、護符の役割を担わされていたと述べたが、浮世絵版画を病人の枕元に貼って祈願し、疱瘡平癒を期待するという発想は、どこから生まれてきたものであろうか。護符としての疱瘡絵の系統はどのように迎えられるのであろうか。

元々、日本の版画は仏教版画をその淵源としており、摺仏や印仏など神仏像を木版印刷したお札は、平安時代から存在した。しかし、そこまで遡らなくても、浮世絵版画を護符として貼付するという使用方法の系譜は、元禄期に隆盛をみた大津絵などにも見出すことができる。大津絵は仏画として始まったものであるが、後には色々な画題が描かれるようになる。近江大津の追分で、旅人にお土産として売られていたが、ただ眺めて楽しむだけではなく、実用的な一面も有していた。

浮世絵研究者の仲田勝之助は、大津絵に関して次のような興味深

い一文を書いている。

大津絵の中で最も普通に知られている鬼の念仏なども子供の夜泣きに効験があるとして枕の上などに張られたもので、これも一つの禁厭の護符としてであり、その他藤娘は良縁を得、雷の図は雷よけになり、瓢箪鯰は水難除け、座頭は倒れぬ符、槍持は道中安全、鷹匠は五穀成就、弁慶は火難盗難よけ、矢の根は悪魔よけ、外法大黒は無病長寿の符であるといわれている。「仲田 一九四三・二五」

鬼の念仏以下藤娘・雷の図・瓢箪鯰云々は、すべて、大津絵によく描かれた画題であるが、それぞれが特定のご利益を有している。「禁厭の護符」としても、重宝されたという。これは、禁呪の図像すなわち、「まじない絵」あるいは「お守り絵」と呼んでもいいものである。春画(枕絵)にも、似たような用法があったといわれている。すなわち、箆筒や財布に入れておくとお金が増えるとか、蔵に貼っておくと防火の護符になる、また武士の家では武運長久のお守りとして、鎧櫃の中に春画を入れておく風習があったといわれている。「氏家 一九九八・六六―七〇」。

案外、浮世絵は見て楽しむだけのものではなく、その外の役割も重層的に担っていたのかもしれない。あるいは、商品の販売促進の

ために、商人たちがそのような付加価値を宣伝したのかもしれないが。大津絵には、疱瘡絵の画題でもある鍾馗や為朝も既に描かれており、護符としての疱瘡絵の用法は、こうした系統の中に位置付けることができよう。

このように疱瘡絵のルーツは、朱鍾馗や玩具絵、芝居絵、大津絵などに辿ることができる。様々な浮世絵の系統が、疱瘡絵の図像や形式そして用法に影響を与えたに違いない。

おわりに

疱瘡絵に関連する文献を主な資料として、疱瘡絵の研究史、名称と定義の問題、実際の取り扱いの様子、そして発生の経緯とその出自について検討してきた。筆者は美術的な観点から疱瘡絵に関心を持つものではなく、庶民と疱瘡との関わり、すなわち疱瘡をめぐる民俗の一端として疱瘡絵に興味を抱くものである。したがって、本稿は疱瘡の民俗文化史の一部を成すものである。本稿で明らかになったことをまとめると次のようになる。

1 近年の疱瘡絵研究では、必ずしも疱瘡絵の定義やその範囲が明瞭ではなかったが、明治・大正時代の研究者は、色と摺りの様式から、明確な定義を与えていた。本稿では、その定義を前提としながらも、庶民が疱瘡絵をどのように受容し、利用していたのか、その実態の解明を目指す民俗文化史の立場から、浮世絵の形式のみにこ

だわることなく、表現内容や用途・用法からも判断して、疱瘡絵の問題に迫る必要があることを主張した。

2 疱瘡絵は、疱瘡見舞いに専ら用いられた、かなり特異な浮世絵であり、その発生からして疱瘡見舞客の購入を当て込んで、商品開発された可能性が高い。また、疱瘡絵には護符的な用途と病床の瘡小児のなぐさみ・弄びものとしての用途があったことを指摘した。そして、本復後すぐに放棄されるという、これまた特殊な末路を辿る浮世絵であった。

3 最後に疱瘡絵の発生についていくつかの推量を示した。疱瘡絵の発生の時期に関しては、従来、朝倉無声が触れているのみであるが、本稿では、彼の主張より四〇〇〜五〇〇年は遡ることを資料によって明らかにした。また、疱瘡絵が誕生するに当たって影響を与えたと思われる浮世絵の系統としては、鍾馗の図や芝居絵・玩具絵、大津絵などが想定できることを示したが、これに関しては、今後さらなる検討が必要となろう。

付記・本稿は、国際日本文化研究センターの共同研究「画像資料が物語る身体の文化史」の研究会での発表に基づいて成稿したものである。発表の機会を与えて下さった栗山茂久先生と研究会のメンバーに謝意を表したい。

註

(1) 簡単な紹介は早くからあったが、美術的な観点からの浮世絵研究においては顧みられることは少なかった。たとえば、美術史の相見香雨は次のように述べ、極めて消極的な評価しか与えていない。

普通疱瘡絵といふのは（中略）極めて芸術味の希薄なものであるから、今日では風俗史料としてこれを取り扱うほかないものであるけれども、その絵は大抵浮世絵師の手に成つたものであるから、瑣末なことながら浮世絵研究中の一題目とならないこともない。

〔相見 一九一八・二二〕（傍線は引用者）

しかし、医学史の分野では早くからその存在は注目されていた。明治四十三年の時点において、医学史の泰斗富士川游の主唱によって医科大学内で開かれた医学書展覧会で、これらの浮世絵が展示されたことが、当時の浮世絵雑誌『此花』第二枝二頁に紹介されている。また、医学史家の宗田一「一九七八」や中野操「一九七八と一九八〇」が編集した医療関連の画像資料集にも収録されている。

(2) 立川昭二「一九八四・一二〇」、宮田登「一九七二」参照。

(3) 麻疹絵について。疱瘡と麻疹（ハシカと同義）は近世ではよく並び称される病いであり、疱瘡絵とやらんで麻疹絵と呼ばれる浮世絵がある。現存する麻疹絵はほとんど文久二年（一八六二）の大流行に際して江戸で版行されたものである。麻疹絵は多色摺りであり、疱瘡絵より絵画的に人目を引き、また詞書きを含め内容が多様豊富

（呪術的療法・食物禁忌・流行年・社会風刺にまでその内容は及ぶ）であるなどの理由から、研究対象となりやすかった。疱瘡絵は麻疹絵に比べると一般的にはその内容は乏しいといえるが、量的には大量に出版・消費されたと推測する。麻疹絵については、ローテルムンド「一九九六」、町田市立博物館「一九九六・六〇」を参照。

(4) 「八丈島為朝神影」に関しては、馬琴自身が、彼の代表的読本『椿説弓張月』のなかで書き記している。この本の後編の巻頭に為朝の事蹟や伝説を多くの典籍を引用しながら考証した一章がある。その中に「馬琴が家蔵ニ、八朗明神ノ神影一幅アリ。（中略）コハ為朝ノ神体、東都ニ来ラセ玉ヒシ時、神影ヲ版シテ、信心ノ士庶ニ与タルモノナルベシ」とある〔後藤 一九六二・二三〇と二三七〕。この御神体と神影は現在でも伝存している〔久野 一九九三・七〇〇〜七〇四〕。

(5) おそらくその初期の作成目的は、お見舞いの返礼のための控え帳と思われるが、後世になると、我が子の成長過程の一記録として残しておきたいという親の思惑も働いたのかもしれない。というのも、疱瘡見舞帳は、出産見舞帳や初節句・七五三の祝儀帳と一緒に保存されているものがあるからである。

(6) 赤絵との混用・並用に關しては、事典にも、赤絵とは「渡来したアニン染料の赤を大量に、しかも濃厚に使った錦絵をいう」が、それ以外にも「また疱瘡絵の意にも用いられる」とあるから、かなり広範囲に行われた用法であることがわかる〔原色浮世絵大百科事典 一九八二b・一三〕。

(7) この連載の第六回目には、「疱瘡絵」が取り上げられているが、

用語に関しての言及はない「宮武 一九一〇b」。

(8) 「町田市立博物館 一九九六・一八」参照。

(9) この風習は種痘を実施するようになっても続いたらしい。昭和三十三年の民俗報告に、東京都八王子市恩方の老女(調査時八九歳)の話として、植え疱瘡(種痘)をしたとき、「疱瘡見舞といって、達磨の絵をかいた袋に、赤いお菓子を入れ、人々が持つてくる」ことがあったと報告されている「草川 一九五七・七」。

(10) 以上の数字は太田素子作成の一覧表による「太田 一九九三・一八九」。「絵」と「紅絵」の異同は不明であり、また、現物を確認できないので「紅絵」が、紅の濃淡二度摺りの疱瘡絵であるかどうかは判断できない。また、紅絵(または絵)を贈った見舞人の割合は、年代によってかなり差が見られる。一番古い疱瘡見舞帳である寛延三年(一七五〇)の「御疱瘡之御見舞御音物」には、全部で一五四名の見舞人があったことが記されているが、そのうちの一名のみが、「絵式枚」を見舞品として持参したことが書き留められている。次に古い明和四年(一七六七)の見舞帳では五八名の見舞人の中で四名が、安永七年(一七七八)の見舞帳では五五名中一六名が、そして文化八年(一八一二)の見舞帳では七〇名中半数の三六名が、「絵(多)」や「紅絵(べに多)」を見舞品として持参したことが記されている。以下、文政五年(一八二二)では八五名中三〇名、弘化五年(一八四八)では八四名中十二名、安政二年(一八五五)では二九名中二名が、「紅絵(または絵)」を持参している。

(11) 疱瘡治療に赤色を用いる民俗は、ヨーロッパや中国にもあった「藤浪 一九四二・一〇八〜一〇九」、「ベルセ 一九八八・二三四」。

(12) 史料2の『御鷹匠同心 片山家日常襍記抄』の「附 自筆お伽絵本」には、疱瘡絵とは断定はできないのであるが、たくさんの達磨の絵を寝転んで眺めている童児を描いた挿絵が載っている。「アチック 一九七三・五二一」

(13) 疱瘡が治ったから、回復の儀式をするのではなく、回復の儀式をすることが治癒の一環となるのである。儀式と治癒の関係については、「上田 一九九〇」を参照。

また、「疱瘡神送り」「疱瘡神流し」については多くの資料があるが、ここでは、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が、島根県立松江中学に英語教師として赴任していた時(一八九〇〜一八九一)の見聞をあげておく。

妙なものが川を流れてゆく。諸君には、なんだか見当がつくまいと思う。(中略) 疱瘡にかかったものが、もうこの分なら疱瘡も本復するとわかると、ちようどキツネつきが、おれはきつとキツネを落としてみせると誓って、おキツネさまに御馳走を上げるように、疱瘡神にごちそうを上げるのである。まず、米俵の口につかうさんどわらの上に土器かわらけを幾つかのせ、その土器に、稲荷さまや疱瘡神さまの好物だとされている、小豆飯を炊いて盛る。それから、竹の串に御幣をさして、これをさんどわらか、小豆飯の上に乗せて置く。このばあい、御幣の色は、赤に限る。(ほかの神にあげる御幣は、かならず、白い色に限られている。このことを忘れないで頂きたい。)そして、この供え物を、病気の治りかけた当人の家からそうとう離れたところにある立ち木に吊すか、あるいは流れ

川に流すかするのである。これを「神送り」という。「小泉 一九七〇・五二～五三」

(14) 疱瘡絵本『疱瘡軽口ばなし後編子宝山』の巻末には、「御子さま方のよき御なぐさミにてほうそう御見まひに専要の品也」という宣伝文が載っている「香川 一九九六・二六」。

(15) 近世の疱瘡を取り巻く状況の詳細に関しては、別稿を準備中である。ここでは、資料を上げることが省いて結論のみを述べる。

(16) 本稿脱稿後に、『新編柳多留』十三集（天保十五年序、一八四四年）に、「為朝を平家に画た疱瘡絵」という川柳が載っていることを知った。よって、明治前に「疱瘡絵」の語句があつたことが確認できる。なお川柳の意味は、白を旗印とする源氏の為朝も、疱瘡絵の中では、赤（平家の旗印）に描かれるという意と解釈される。『新編柳多留』十三集は、鈴木勝忠（孔版）『未刊雑俳資料』二十一期5一九六三年、に収録。

参考文献

- 相見香雨 一九一八 「疱瘡絵」『浮世絵』第三五号 浮世絵社 二二～二三頁
- 朝倉無声 一九一三 「日本版画類纂其二・疱瘡絵考」『此花』第一四枝 此花社 一四～一五頁
- アチック・ミューゼウム（編）一九七三 『御鷹匠同心 片山家日常棟記抄』日本常民文化研究所編へ日本常民生活資料叢書 第十一巻

三一書房 三九九～五二二頁

飯島虚心 一九〇〇 『日本繪類考』 国立国会図書館蔵

稲垣進一・上笹一郎・黒田日出男監修 一九九四 『浮世絵の子供たち』 東武美術館

上田紀行 一九九〇 『スリランカの悪魔祓い…イメージと癒しのコス

モロゾー』 徳間書店

氏家幹人 一九九八 『江戸の性風俗』 講談社現代新書

太田和子 一九九七 「江戸近郊農村の菓子屋」『和菓子』第四号 虎

屋文庫 三六～四九頁

太田素子 一九九三 「近世農村社会における子供をめぐる社交…甲斐

国山梨郡下井尻村依田家文書を手がかりに」『国立歴史民俗博物館研

究報告』第五四集 一六三～一九三頁

大槻清文堂 一九一五 「疱瘡絵」『風俗図説』第二集第一号 風俗図

説社 一四頁

香川雅信 一九九六 「疱瘡神祭り玩具…近世都市における民間信仰

の側面」『日本学報』大阪大学文学部日本学研究室 第一五号 一

九～四六頁

草川隆 一九五七 「疱瘡の話」『民俗』第二六号 相模民俗学会 七

頁

原色浮世絵大百科事典編集委員会（編）一九八二a 『浮世絵師』へ原

色浮世絵大百科事典 第二巻 大修館

原色浮世絵大百科事典編集委員会（編）一九八二b 『様式・彫摺・

版元』へ原色浮世絵大百科事典 第三巻 大修館

小泉八雲 一八九四（抄録一九七〇）『日本瞥見記』へ明治文学全集

第八卷 筑摩書房 三〇三三五頁

国立故宮博物院編輯委員會(編) 一九九七 『迎歲集福・院藏鍾馗名

画特展』国立故宮博物院(台北)

後藤丹治(校注) 一九六二 曲亭馬琴『椿説弓張月』(日本古典文学

大系)第六一卷 岩波書店

小林太市郎 一九四六 『辟邪絵巻に就て』『大和絵史論』全国書房

二二七〜三二五頁

古堀榮 一九四〇 『疱瘡絵』『浮世絵界』第五卷第五号 浮世絵同好

会 一二〜一四頁

阪口弘之他(校訂) 一九九六 近松半二他『太平記忠臣講釈』(叢書

江戸文庫)第三九卷 国書刊行会 一八五〜二八三頁

サントリー美術館(編集発行) 一九九七 『子どもの領分』

吹田市立博物館(編集発行) 一九九五 『疫神信仰にみる祈りと願

い』

鈴木勝忠(編著) 一九八二 『続雑俳語辞典』 明治書院

宗田一 一九七八 『日蓮宗・疱瘡守護神』日本医史学会編『図録日本

医事文化史料集成』第四卷 三一書房 一五四頁

高木誠一・永井建 一九二八 『疱瘡神のこと』『民族』第三卷第五号

民族発行所 一六七〜一七〇頁

高羽五郎(翻刻校定) 一九五二 松葉軒東井編『譬喩尽』(国語学資

料)第一〇輯 孔版 国立国会図書館蔵

立川昭二 一九八四 『病いと人間の文化史』(新潮選書)新潮社

暉峻康隆他(編) 一九七三 『馬琴日記』第二卷 中央公論社

天理大学付属天理参考館(編) 一九九九 『おもちゃ絵の世界』 天

理ギャラリー

同文館編輯局(編) 一九一一 香月牛山『小兒必用養育草』(日本教

育文庫)衛生及遊戯篇 同文館 二四四〜三五五頁

仲田勝之助 一九四三 『浮世絵裸記』二見書房

中野操 一九七八 『錦絵に見る民俗医療思想』日本医史学会編『図録

日本医事文化史料集成』第四卷 三一書房 一〇八〜一〇九頁

中野操 一九八〇 『疱瘡絵』『錦絵医学民俗志』金原出版 七四頁

中村幸彦・日野龍夫(編) 一九九一 北尾重政画・弄簾子讚『江都二

色』(新編稀書複製会叢書)第三七卷 臨川書店 一〜九三頁

根岸謙之助 一九八八 『医の民俗』 雄山閣

花咲一男(編著) 一九八一 『疱瘡絵(本)について』『疱瘡絵本集』

太平書屋 九〜一四頁

林美一(校訂) 一九八四 山東京伝『腹筋逢夢石』(江戸戯作文庫)

河出書房新社

久野俊彦 一九九三 『為朝伝説の生成と成長』伊豆諸島・小笠原諸島

民俗誌編纂委員会編『伊豆諸島・小笠原諸島民俗誌』ぎょうせい

六九六〜七一三頁

福原敏男 一九九三 『疫病・朱鍾馗・端午の節供』井之口章次編『日

本民俗学フィールドからの照射』雄山閣 六六〜七八頁

藤井裕之 一九九五 『疱瘡・麻疹に見る病観・疱瘡絵とはしか絵の比

較』『近畿民俗』一四二・一四三号 近畿民俗学会 一〜一六頁

富士川游 一九二二(復刻一九六九) 『日本疾病史』(東洋文庫)一三

三 平凡社

藤沢衛彦 一九六一 『民俗版画年表』『民俗版画』(日本版画美術全

- 集〕第六卷 講談社 一一九〜一二四頁
- 藤浪剛一 一九四二 『日本衛生史』 日新書院
- ベルセ、Y・M 一九八四(和訳一九八八) 『鍋とランセット』 新評社
- 町田市立博物館(編集発行) 一九九六 『錦絵に見る病と祈り〜疱瘡・麻疹・虎列刺』
- 水野稔(校注) 一九五八 北尾政演『御存商売物』〈日本古典文学大系〉第五九卷 岩波書店 八八〜一〇五頁
- 南川伝憲 一九九一 『疱瘡の伝来と越前大野藩』 『えちぜんわかさ福井の民俗文化』福井民俗の会 二八〜三八頁
- 宮武外骨 一九一〇 a 『日本浮世絵類纂其一・紅絵』 『此花』 第一枝 雅俗文庫 一三頁
- 宮武外骨 一九一〇 b 『日本浮世絵類纂其六・疱瘡絵』 『此花』 第六枝 雅俗文庫 一三頁
- 宮島新一 一九八五 『辟邪絵―わが国における受容―』 『美術研究』 第三三一号 東京国立文化財研究所美術部 一〜二三頁
- 宮田登 一九七二 『疫病神の福神化』 『近世の流行神』 評論社 九二〜一〇〇頁
- 森嘉兵衛・谷川健一(編) 一九七〇 橋本伯寿『国字断毒論』〈日本庶民生活史料集成〉第七卷 三二書房 九三〜一九頁
- 雄山閣『講座日本風俗史』編集部(編) 一九五九 隴西隠『進物便覧』〈日本風俗史〉第五卷(三一九〜三三六頁)・第六卷(三三八〜三三六頁)・第七卷(三三三〜三三四頁) 分冊収録
- ローテルムンド、H・O 一九九〇 『庶民信仰と疫病』 辻惟雄編『庶民仏教』〈図説日本の仏教〉第五卷 新潮社 三一七〜三二六頁
- ローテルムンド、H・O 一九九五 『疱瘡神』 岩波書店
- ローテルムンド、H・O 一九九六 『疱瘡絵・麻疹絵に見たる庶民信仰の諸形態』 『錦絵に見る病と祈り〜疱瘡・麻疹・虎列刺』 町田市立博物館 九〜一六頁
- 渡充子 一七九五 『痘瘡養育』 国立国会図書館蔵
- Jannetta, Ann. Bowman. 1987 *Epidemics and Mortality in Early Modern Japan*. Princeton University Press (New Jersey)